「心のコントロールをめぐる諸問題」

企画・司会 恩 田 彰 (東洋大学名誉教授)

シンポジスト

高 橋 哲 也 (文京区教育委員会 嘱託)

柴 田 出 (柴田クリニック 院長)

池 本 薫 (産経新聞社 論説委員)

岡 野 守 也 (サングラハ心理学研究所 主幹)

このシンポジウムは、平成7年11月18日(土)、日本女子大学目白キャンパスにおいて行われた。本報告は、その際の録音テープを事務局において起こし、それに各シンポジストが訂正加筆し、司会の恩田が全体をまとめたものである。

司会:大変お待たせいたしました。これから日本応用心理学会の公開シンポジウムを開催したいと思っております。私は恩田と申します。企画とそれから今日の司会をさせていただきますので、どうぞよろしくお願ひします。今日のテーマは「心のコントロールをめぐる諸問題」ということでございます。後で趣旨説明をいたしますが、いわゆる世間でいう、マインドコントロールという問題、この面からひとつの発想をいたしましてその本質をさぐり、これをどのように我々研究者として対処し、あるいはこの問題についていろいろな問題を起こしておりますので、それをどのように防ぎ、それからどのようにこれをいい方向へ、建設的な方向へもってゆくにはどうしたらいいか、このような問題を考えたいと思ひます。

趣旨説明はのちほどいたしますが、まず今日の話題提供者の先生を、ひとりひとり、ご紹介をさせていただきます。今日はこちら私のほうから隣、私から右側になりますが、先生方からいけば左側になります。教育の視点からというので、高橋哲也先生でございます。先生はここにすでにご案内がありますように、文京区の教育委員会の嘱託をしておられます。日本応用心理学会の運営委員をしておられ、なお東京都教育庁生涯学級情報センターの指導者であり、講師をしておられます。それからご専門は教育相談、とくに教師のカウンセリング、こういう面を

主としてご研究しご担当になっておられる。そういう面からお話をいただけるかと思ひます。

それからそのお隣は柴田出先生でございます。先生は現在柴田クリニックの院長をしておられますが、ご専門は精神医学で精神科医でいらっしゃいます。それでご専門からみますと、精神分析的な精神療法、そういう面を通して治療をやっておられます。それからその他駒沢大学文学部の講師をしておられ、アルゼンチンのジョン・F・ケネディ大学の非常勤教授ということで、お話を承りますともう十数年以上、毎年そこへ行っておられる。そこでスペイン語で4日か5日くらい、毎日8時間くらい講義をされるそうです。そういう面で非常に、その面のご専門の深い先生でいらっしゃいます。

それから池本薫先生。池本先生は産経新聞社の論説委員をしておられまして、教育と情報を主として担当しておられるそうです。それから、元フジテレビのニュースの編集長をしておられたということでございます。そういう面で、マスコミの面で非常にお詳しい方で、そういう面でお話を承ることになりました。

それから最後に岡野守也先生です。先生はサングラハ心理学研究所の主幹をしておられまして、もと牧師を十年以上やっておられて現在は仏教のほうの唯識心理学のワークショップの指導をしておられる

という、専門家でいらっしやるわけです。それからトランスパーソナル心理学、こういう面を日本で開拓されたおひとりでございます。そういう面でみんなそれぞれの専門の領域で活躍しておられる方でございます。そういう方々からお話を承るわけでございます。

そこでこれから、趣旨説明を簡単にさせていただきたいと思います。これは最近マインドコントロールということが、言葉からその事実といいますが、そういうようなことが問題となっております。そのマインドコントロールというのは必ずしも悪い意味のことだけではないんですけれども、今日では悪い意味で使われることが多いわけです。そこでマインドコントロールを分けますと、マインドコントロールというのは本来ニュートラルな意味をもって、いわば「心のコントロール」ということであつたわけなんです、今日問題になっていることから、破壊的なカルト・マインドコントロール、そういうような特殊な意味に使われることが多くなっております。マインドコントロールというのはふたつありまして、自己（セルフ）マインドコントロールというのと、それから他者マインドコントロールというふたつにわけられるわけです。自己マインドコントロールというのは、いわゆる自己暗示というのもあるし、例えば自律訓練法というのがあるし、それからメディテーション（瞑想）というのもあるし、それからリラクセーションというのも入ってくると思います。それから他者マインドコントロールというのを広く見ますと、他者暗示、他人が他の人に暗示をする、それから教育というのもあるし、心理療法というのもあるし、もっと極端に言えば拷問とか薬物投与とか電気刺激、マスコミの情報操作、こういうふうにかなり広い領域をもっているわけです。そして一般にはマインドコントロールというのは他者がマインドコントロールすることをいう場合が多いわけです。それでは破壊的なカルト・マインドコントロールというのはどういう特徴をもっているかという、これは他者がある個人のアイデンティティーを壊してしまう。そして壊した上で、その上で新しいアイデンティティーに置き換えてしまう、そういう働きをもちます。そしてその人をして、他者への依存性、それから集団や組織への順応性を育ててしまう。そして本人の自立性、自己決定性、自己責任性を奪っ

てしまう。こういうようなところがあります。すなわち、他の人が相手のためではなくて、マインドコントロールをする側の利益とある目的の達成のために相手の心、これを分析しますと、行動・思考・感情・信念（ビリーフ）を一時的または永続的に操作してしまふ。こういうような面があるわけです。しかも本人が自分で進んで他の人の命令とか誘導に従って、自分が他の人からコントロールされていることに気付いていない、自覚してないというのがひとつの大きな特徴だと思います。それからこのマインドコントロールをもっと極端なかたちで見ますと、洗脳という言葉があります。これはブレインウォッシングというんですが、これは長時間の監禁とか拷問とか薬物投与とか電気刺激などの強制とか脅しが働いて、個人の人格を破壊するまでに至る。ですからマインドコントロールというのは他の人の意図とか影響力とか、自己が置かれている状況に気付いていないということですね。そういう面があるわけです。自己マインドコントロールにおいても、もちろん他者の影響を受けますけれども、他者マインドコントロールの場合は特に多く問題が出ているようであります。マインドコントロールは「心のコントロール」ということでは非常に広い意味をもって、いわゆる多義性をもっているわけですね。そこでコントロールの主体とか、意図、方法、対象によってそのマインドコントロールの善し悪し、功罪がでてくるわけです。そこで教育、治療、マスコミ、救済——救うということですね——または自己成長の目的をもって行なわれることもあれば、相手を支配し、管理し、情報操作し、ロボット化する、という目的で行なわれる場合もあるわけです。そういう面でかなり広い意味を持っているわけです。以上のことから今回は教育と臨床活動、マスコミ及び宗教の視点からマインドコントロール、すなわち心のコントロールはどのようにして行なわれるかというようなメカニズムを明らかにすること、それからよいマインドコントロールの受け方、どのように受けたらいいかと、いい面もあるわけですから。良いマインドコントロールの受け方、それから悪いマインドコントロールを防ぐ方法、それからそれを解除する、すなわち解き方ですね、それからそのための日常の態度。こういう面について先生方のお話を通して検討、考察したいと思っております。

ちょっと時間を過ぎましたけれども、一応趣旨説明を終わりました、これからおひとりずつ大体20分ずつ話をさせていただきます。そして終わりましたらちょっと10分ほど休憩をとりまして、今度は先生方に補足をやっていただいて、それからフロアの先生方とディスカッション、討論をやるということで、5時ということですが、5時10分ぐらい、休憩時間がありますからちょっと過ぎるかもしれませんが、あまり遅くならない程度に、5時10分程度になるかと思えます。そういう予定でやらせていただきますのでお願いします。ではお一人一人、これから高橋先生、柴田先生、池本先生、岡野先生の順番にお話させていただきます。それでは高橋先生からお話いただきます。先生方はどうぞ向こうのほうで聞いてくださって結構ですので。よろしくお願ひいたします。

1. 教育の視点から 高橋 哲也

高橋：高橋でございます。先程ご紹介いただきました。私は教育の視点からということでございますが、教育といえますと、恩田先生のお話のように、マインド・コントロールというのは大変大きな課題でございます。私は教育現場というものと、教育相談、それと家庭という視点からみたいと、思っております。時間が20分というので、20分で終わりますかどうか、ちょっと詰めて、あとで補足で申し上げればよいと思えます。

今お話がありましたように、良いマインド・コントロールの受け方、というお話がありましたけれども、これは良い受け方としては学校教育の教育効果をあげるためにはかなりいい面があります。感受性の訓練などはよくやっております。特に体育関係の面で、中学・高校の部活などは大変これで効果をあげております。その他、学習指導、学習効果をあげるということでの感受性の訓練などもかなり行なわれております。最近では、学習塾などではマインド・コントロールの手法を使った方法も盛んに行なわれているのも現実であります。それではどういうマインド・コントロールかという、これにはいろいろございます。実は教育現場では、教師そのものが問題というのであるわけです。これはあまり大きくは言えないのですが、いろいろとございます。現実にもそういう方で問題が教育現場のなかで行なわれている。人事面での問題で、これはあまり大きいことは

ちょっと言えませんが、置いておいて、後でまたお話し申し上げます。

これなども大きい面でもらえていって、事例をちょっと申し上げたいと思います。実は私、東京都の教職を退職をいたしましてから、あちこちいろいろやっております。教職に在職中からいろいろと現職の教員の再教育とか、それから相談、学習指導をどうもっていくかといろいろな面で十数年間、20年近くですが、やってまいりました。その中で最近の問題を申し上げたいと思います。

これは私、私立の学校のほうに、頼まれて、その学校のほうに行くと、教師と膝をまじえて現実、その学校でどう対応したらいいかというようなこともやっております。この私立の学校では3回、4回というところもあります。そこで2校、事例をみたいと思います。これは実は新聞紙上に出了たものですから、はっきりと言ったほうがいいという気もあるのです。これは、どういうことかという、教師の感覚訓練というのかどうか、過熱する部活動といったらよいでしょう。部活動の関係で、スポーツ校なのですけれども、顧問が「勝てばなんでも許される」とか「優勝すれば自由に思い通りになる」とかいうことです。顧問教諭が口にだして言う、ということがあります。これはもうちょっと行き過ぎた部活動の事件なのですけれども、この44才の教諭なのですけれども、陸上競技の部の顧問なのです。この学校はかなり有名校です、スポーツ関係です。この44才の教諭が、とにかく「優勝すれば自由に思い通りになる」と、おまへたちはと、やるわけです。それを優しく言ったり、強く言ったり、ひとつはちょっと脅してみたいな形になるのでしょうかけれども、そういう繰り返しをして、またそこで指示暗示をしたり、特訓をし、説教をし、それから最後は体罰につながってしまったという問題なのです。この学校の部員が5人、集団でやめたわけですが、このやめた部員が早く感知したからこの生徒は逃げられたのです。この学校などは私立の学校ということで、かなり反響がありました。これはどうするのかという、とにかく暗示をしてしまう、指示暗示をくりかえし、そのためには暴言などもはいたという生徒からの報告なのです。そういう形で行なわれ、この学校は優勝する。有名校なのです、こういう形でもっていくという、完全にこれはマインド・コントロールをずっ

と使っていく。部で合宿へ入ると瞑想させたり、それから催眠暗示もする。こういうような形でとらえていく。一部、いいのですが時によってまずくなってしまう。裏を返してしまうとまずいかたちになって新聞報道に出てしまった。

それからもう一件なのですが、これはやはり陸上部の関係です。これはハンドボール部とソフトボール部、テニス部、ここが問題となったんです。これは全国レベルまでいってるんです。インターハイ、国体なども出場してるのですが、この指導教諭は、顧問で、「勝てば何でも許されるんだ」という形で、これがうたい文句でもっていくという。そしてここで問題になったのは何かというと、その部員が突如家出をしてしまった、そして戻ってきたのです。そこから発覚いたしました。これは、常時その教師は「勝てば何でも許される」を繰り返し、指示暗示、説教、特訓、体罰等を繰り返していた。ですからいい面と悪い面を出していた。夏なども夏休み中はほとんど毎日実施していた。こういうことで、それからまた礼儀正しくする。先輩・後輩の関係が非常にうるさい。そういうことなのです。この学校では、新聞に出たあと、10月17日にですね、原因は「いじめと結論できない」と変わったことが出たのです。実際に行なわれたのは、夏休みのことなのです。ということがおきたのです。教育委員会のほうでは、中には自殺した生徒もいるのですけれども、これは自殺は原因ではないということなんです。行き過ぎた指導だったということで、県の教育委員会のほうではそう申しているわけなのですけれども。こういうことで教諭によって行なわれたものは数多くあるわけです。平成6年度の教師による体罰は、文部省の報告は氷山の一角ではないかといわれているわけですが、463件あるわけです。大変失礼なのですけれども、市町村の教育委員会では報告していないケースもあるようなものですから、正確にはまだいかないと思います。そういうことです。かなりこういうような繰り返しをして、学校の手柄と申しましょうか、その学校の名を売るかたち。これはスポーツ部関係では特に多いように見受けられます。こういうかたちで出てまいりますと本当にどうなるのか、しかしこれは高校だけではなく、事実、小学校、中学校でもあるわけです。いい面では小学校などは、体育の指導で、跳び箱のできない子供、鉄棒のできない子供

などは感受性の訓練をいれまして、そしてイメージ療法も、イメージを持たせて「できるんだ、だいじょうぶ、こわくないよ」とこうやって誘導していく。指示暗示をしたり、それからイメージをもたせて「やればできるんだよ」という形でもっていくって、運動機能のにぶい子ができるようになるという。こういう面でもっていくと、かなりいい面が出てまいります。これは私、個人的にも知っている教師なのですが、実はイメージを持たせて、それから指示暗示をしまして学習効果をあげている教師がいます。算教のできない子供に、小学校ではです。こうやっていくんだよ、こうやってこうできるよ、というふうな形でイメージをもたせていく。それから、体育もそうだったのです。水泳のできない子、水を怖がる子供に「水はこわくないよ、さかなさんはこうやって泳ぐんだから大丈夫だよ」とイメージを持たせたり、指示暗示、催眠もおこなって効果をあげている場合がございます。これは教育効果のよいものです。中学でもそれに似たような形で部活でやって効果をあげた場合がございます。特に体育祭のときなどは、「こうやっていけば、きみたちは何でもできる。」というふうな形でやっていくという、そういうことで生徒自身、子供自身、小学生自身が自分の学習効果のためにリラクゼーションをしたり、自己イメージを持ったり、自己暗示をしたりして効果をあげている場合もあります。これはスポーツ教室もそうなのです。民間に参りまして、学校教育からはずれた水泳とか卓球、テニス、野球、サッカーなども現在行なわれて、これはいい面がございます。特に水泳教室、最近また卓球とか、サッカーなどスポーツ教室では指示暗示をしたり、イメージ療法、またリラクゼーションをして、時によって催眠を行っているところもがございます。この点非常に効果をあげていいのではないかという気がします。

ところが、悪いほうなのですが、これは親の相談のほうから、最近非常に困っているというケースがございます。これは訪問販売の本の売りつけなのです。対象は小学生・中学生の家庭なのですが、電話、訪問、そして巧妙な商法でもっていくわけです。こういう販売で大変困ってしまう。これに乗ってしまう。その家庭の母親などはうまくそれに乗せられて、膨大な金だったというのですね、金を払うとなると、十何万だった。それから教材の販売、これも電話、

訪問、巧妙な商法でもっていく。この教材で勉強すると立派な中学に受かるとか、高校に受かる。そういうことでもっていってしまう。これはかなり今流行してるようです。これも本当にマインド・コントロールだと思うのです。この訪問のときの話などは非常に巧妙にもっていくという、教材の売りつけです。それから最近、学校付近でパンフレットを配布して、これは問題になっているケースなのですけれども、今子供が少なくなっていますから、塾の勧誘です。塾の集會に、強制して入れるかたちなのですけれども、子供にパンフレットを渡しまして、回収箱を要所要所に置きましてそこにいれなさいという形でもって行く。そこの電話番号をかけて訪問する。そういうことで巧妙に誘いをしていく。そして塾に入れるという、巧妙な方法も実はされている。これには大変困っている親がいる。それでどうしたらいいのかという対応の仕方なのです。私は、そういう相談を受けましたときには、電話の場合は一応聞き、そして断る。数回あった場合には「責任者は誰ですか」ということを聞く。あくどければ警察に報告したらどうか。警察に報告して解決したケースがございます。いちばん困るのは訪問なのです。この場合、相談を受けたときには、「家のなかに入れなさい」といいますよ、そして、断りなさい」と。ひどい場合には警察に報告すると。巧妙にくるのでひっかかってしまう、ということです。

それから最近、これは大きい問題になっているのですが、小学校の場合は全員就学ということですよ、ね、障害のお子さんでも全員就学できることになっております。昭和49年東京都は実施しております。その後、就学猶予とかなにかをしているという事例が少ないのですけれどもあるのです。これは困った問題で、いろいろ大きいことは言えませんが、ひとつの団体に関係しているという。これなどは現実に困って、どうしたらいいかと就学相談関係の担当の方は大変苦労なさっているということでございます。学校現場では、ひとつの宗教に関係ある方だと思われるのです。学校給食を一切食べないという、なにに食というのを持参して食べている。それから体育も参加しないとか運動会も参加しないという。まあ学校教育の現場からの相談なのですけれども、こういうのも出ておまして、これも大変なケースだと思っております。そういうようなことで、実際

に教育現場ではどうしたらいいのか、これに対する児童生徒の問題、個々の問題もござります。教育現場でどうしてあげたらいいのか。取り扱いをどうしたらいいのだろうか、という点では非常に問題になっているということがいえるかと思えます。実は私、教師の指導をしている関係で、ある教師からの相談を受けましたのですが、教師自身がひとつのことに、ある団体に凝っておりまして学習指導がどうもまくいかない、親からちょっとつつかれて、管理職からはいろいろ言われる。たまりかねてその方は退職したのです。退職しないで残ったもうひとりとは異動処置というかたちにしたわけです。こういう現場で、こういう方がいるというのも非常に困るし、また、親が子供を通していろいろやってくるという、そういうことが現実にあってこれは問題だという気もしております。教育といえますと、いいたいことがもつといっぱいあるのですけれども、時間がきましたので、このくらいにして、後で付け加えたいと思えます。現実の教育現場で行なわれているものというのはそういうことで、いい面と悪い面があるということです。あとは他の方にお渡しします。ちょうど時間がきたようですので、あとで付け加えたいと思えます。

司会：ありがとうございます。それでは次は柴田出先生から、臨床活動の視点からお話をうかがいたいと思えます。

2. 臨床活動の視点から 柴田 出

柴田：私、柴田と申します。どうぞよろしく。座って話をさせていただきます。

高橋先生が20分と時間があつたのに、15分でお話しになったのですが、私のほうはもっと短くなっちゃうかも知れませんが、臨床活動の視点からという題になっております。私が個人で精神科の精神療法を中心としたクリニックを始めたのは24、5年前になると思えます。その前は精神病院の院長をしていました。その頃から、つまり約40年前から精神療法に興味があつて行っていました。開業した頃は殆どはノイローゼの患者さんが中心でございました。この14、5年前くらいから神経症の患者さんというのは非常に少なくなって、大体2割ぐらい。後は人格障害の方々がほとんどといつてもいいでしょう。パブルがはじけたときに、「パブルがはじけたんでノイローゼの患者さんが先生のところ増えたんじゃない

ですか」とよく言われますけれども、私のところでは予約にしていますので増えもしませんし減りもしませんし、相変わらずの調子で診ていますが、人格障害の方が多いということ、これは決して人格異常というようにおとりにならないようにしてください。人格の歪みをもったままそれが自分のパターンになって生きている人、と。これは私のクリニックばかりではなくて、大学の病院でもどこでも、現在、人格障害が非常に増えている、ということ。その方々が訴えてくるのは「私は人格が歪んでますか」だなんて、こんな自覚はありません。たいてい、青年期の方々、ときにはサラリーマンの方々でも「何か自分が何をやっても曖昧な感じ」、「心が満たされない、なんか空虚感がただよっている」、「自分が何を感じているのかよくわからない」など、そういう訴えで、自己不全感とでも言いますか、そういうものがございまして。これは全般に自己愛人格障害ということで一応類型することができます。この人たちは、自己心理学を確立したアメリカのコフトという人がいますが、コフトのいう自己愛人格障害というのはどういう人たちかといいますと、頭が良い、仕事がよくできる、美人であるとか目立った長所を大体もっております。はたからは何も問題がないように見えます。ところが、彼らたちは心から相手に共感できない。共感というのは、共鳴とはちょっと違います。共鳴は情緒的な分かちあいですが、共感というのはちょっと認識論的な要素も入って、他人との体験について推論し、判断し、理由をさがすという要素も含んで伝わるわけですね。これが共感です。共感ができない。思いやりがもてない。感謝したりする気持ちが、感謝という気持ちが、我々が、健康な人が感謝する気持ちと違う。「ありがとう」とは言っても心からのものじゃない。羨望が強く、羨ましがる。相手が自分よりも勝れたものを持っているとその人に強い憎しみを感じたり、我が身の不運を嘆いたりしがちです。例えば級長さんで1番の人が2番になっても、1番になった人に対してすごい羨望というものがおこる。それは自分が傷つくからです。自分のプライドを保つために相手を平気で利用するようなどがございまして。ご自分では相手を利用してやろう、なんてそういう魂胆でやっているわけではないんですね。ごく当然のこととして、自分が傷つくことの怖さでやっているわけです。

大変尊大で自分が特別にすばらしい人であると思っております。しかしこれらは表面的な特徴で彼らの心の奥には自尊心が深く傷ついた体験がある。本当は弱々しい、頼りない心が隠されて実はいるわけです。しかし彼らはそんなことを気が付くものじゃない。自分は特別に素晴らしいと思いつくことによって、そうした弱々しい心を否認してなんとか自分を保っているわけでございまして。会社人間でばりばりやっていて、尊大にそうやっている人の中にもそういう方はいらっしゃる。これはちょうど精神分析で英国にいましたウィニコットという人が「偽りの自己」ということを言っております。これ、フォールス・セルフ (False Self) という言葉で言っていますが、偽りの自己という性格病理の概念を提唱したのがウィニコットという人です。偽りの自己にも様々な程度のレベルがあって、高度に発達した偽りの自己は自分の役割を完璧にやって演ずる一方で、そのように演ずることによって内心には、心の内奥には不全感を抱くために様々な補償を繰り返しているわけです。補償するのはお勉強とか仕事とか知的なものをどんどん身につけて、実はよろいを着て内面を隠しているわけです。よろいを脱いでしまえば後は骨が、身もついてない骨ぐらい。そういう弱さをもっている。では本当の自己と偽りの自己ではどう違うのか。本当の自己、これは完璧な本当の自己の人はいませんで、本当の自己になれば自然体、等身大といってもいいでしょうけども、それに近づいてもなりにくい大きなテーマでしょうけど、全般に健康な人たちは、つまり一応健康に生きている人たちは、子供の頃、赤ん坊の頃は誰でも万能感をもってますが、親からなんでもしてもらった万能感があります。なんでもできるんだ、と。親からされてることさえもわからない。子供の万能感を程よく母親が満足させた結果生まれるもので、子供は自分自身の世界をもつようになります。こういうのが成長すると本当の自分というのに近づくことができましょ。ところが偽りの自己の人たちは、わたしたちの精神療法での体験で言っても、やっぱりウィニコットは、臨床体験を通して偽りの自己というものの、概念を作り出したんですが、万能感を満たされなかった子供が自分をとりまく状況に完全に服従して、自分の主体性を押し殺した状態として理解されます。それですから、例えば大人になれば自分というものを殺し

て、もう会社のために尽くして、自分というものを埋没させて、会社と一体化したかたちになって自分というものがばりばりあるような感じ。ところが実は自分という内面というものがいないから、一体化することになって、それを自分であると思っています。本当の立派な社会に生きている、会社の重役さんとかいろんな人たちは、それはもう中身からできあがっているといひましようか、そういう人になります。この偽りの自己は自分をとりまくその環境に適合して、なんとか生き延びようとした、努力の表れであるから、彼らにとってはそれなりの存在理由があったわけでございます。偽りの自己の部分というのは、大体こういう人たちは、よい子であること、優等生、お利口さんです。しかし人間それだけではございません。たいていこれらの背後には悪い子、劣等生、アホという部分だってみんな人間もっているわけですが、それが隠されております。自己愛人格障害の人たちは、つまり偽りの自己を、自分としてのパターンとして生きている人の治療には、この隠された部分が自分の居場所を得て、両者が、悪い自己も良い自己も両立して、初めてそこにできあがるわけです。ですから、悪い子、アホの部分も優等生の部分に入っていく、両立させるということ。それですからこれまでの心のパターンから心を解放することが両立することになるわけです。ただし、よい子・悪い子の部分は時と場所によって悪い子になる部分はあってもいいでしょう。悪い子の時に、そこでそういう行動をしたらいけない、そういうことを言っちゃいけないという時に、そこで悪い子の部分を出すそれは大変ですけども、時と場所を考えるべきでしょう。大体偽りの自己を持った人の特徴というもの、たいてい私たちが聞いても言います。「心の居場所が定まらない感じ」「自分の中身がなにかもろい感じ」「空虚感、うつろな感じがある」、こういうことを言います。真の自分の言葉、感情を実は持っていません。それらが影響しあって、「人と接するときになにかぎこちない」「羨ましい感じ」また、「見放される不安」。見放されるというのは自分が環境に一体化しているために、それから外れることは、自分がなくなることを意味しますから、大変な不安ですから、「見放される不安」しかし内面にはすごい怒りの感情もっております。一応自分のまわりにとけこんでいるように見えていても、何か真にはとけこんでいな

いという「離人感」というものさえも本人たちはもっております。

そこで、赤ん坊の話に変わりますが、——移行対象というのがあります。これはトランジショナル・オブジェクト (transitional object) という言葉で普通言ってますが、これは赤ん坊を観察するとわかると思います。毛布っ子というのがあります。ちくちくちくちくやってます。赤ん坊には現実を認識し、受け入れる能力がまだありません。乳児期には。それかといって、成長していく過程においてはその能力が徐々に成長していきます。赤ん坊の頃は、乳幼児期は母親と一者関係、ユニットになっておりますが、段々と成長するにつれて徐々に二者関係へと移行する、その中間の段階において、内的世界と外的世界が交錯する、そういう心理、心的現実、そこらが毛布っ子とかそういうことをやるわけですね。これらの対象はある程度母親の乳房を表していますが、はじめからの万能感が、かなりそこらでは移行対象に移るときには、少し廃棄されてきております。母親の愛着でしがみついたユニットというわけではございませんね、その時期はですね。自己愛人格障害の人の心の内奥には、以上のことが本人には意識されずに内在化した心的現実としてがっちり横たわっております。彼らは年齢に応じて年をとり、肉体的に成長しても、内在化した心的現実とは歴然として心の内奥に横たえているだけに、その年齢に見合った移行対象を彼らなりに理由付けをして、持ち続けておって、そして自己不全感を一時的に満たそう、ごまかそうとしております。それは大抵移行対象としてはお金である。猫をいっぱい飼っている。私の患者さんのうちでは20なん匹飼っているような人もいます。それとかクスリ、それとか木 (tree)、これは大木というのは頼りがいがある、よりかかりたい、こういうものを表しますね。また弱々しい自分を抱えて、これまで満たされなかった自分を抱き抱えてくれるものの対象としては、全面的に心の寄り掛かれる権威者を求める。神様を求めるような、そういうことをやる。あるいは異性を求める。そういうことによって、心の内奥を抱えてもらうことによって安心する。あるいは自分の部屋に閉じこもって、自分の部屋というのは抱えてくれる対象なんで、そういうことをやります。さっき言いましたペットなんかもそうですね。このような患者さんと臨床の面接

の場面で、こういうことをよく患者さんは言います。「自分の人生が舞台の上で演じられたものとしか感じられない」こういうことを言います。「他人が楽しいという場所に自分が行ってもちっとも楽しくない」「自分がハリボテで生きている感じ」こういう悲鳴のようなものを抱いている声を聞きます。つまり彼らは自分は世の中に参加していないのではないかという実感をもっております。それですからそういう人たちの治療というものは長い^{みちのり}道程をたどりますけれど、結局自分自身との和解、人間社会との和解というのが大切になると思います。私の本日お話ししたことは、一精神科医としての、長年にわたる精神分析的精神療法を行なった立場からのべておりますけれど、これは患者さんの了解を得ているんですが、お名前は言えませんが、その治療過程で気付いたんでちょっと手記を書いてきましたので、読み上げます。「母は私を愛しておらず、利用しようとした。一生涯おのれの忠実な息子に留めておくために、虚偽の愛に溺れさせた。おだてごっこにのせ、私を誉め殺した。これは母にとって半ば無意識であり、意識的には無償の愛を俺に注いでいるつもりである」私を俺と言い替えたところにも俺という中にもちょっと怒りがはいつてますね。「母の愛の欺瞞性は子の差別化で、子供の差別化で証明される。兄には精神的な愛は与えず、ものを与え、私には虚偽の愛を与え、親不孝息子と親孝行息子に仕立て上げた。それはどちらにしても、愛の不在であったがゆえに、母に対して愛は緘黙だが、黙っているがはっきりとした憎しみを、私は自らにも隠蔽された憎悪を累積していった。この不自然な愛情物語は——この人は45になりますが——45年にも渡って続けられていた。私は子供の頃から母を至上のものと思い、母の愛を、そして自分の母に対する愛を疑いもしなかった。しかしそれらはすべて虚偽であった。母は極端な自己愛者であり、聖なる母を演ずることにより、演ずることこそ自己愛の満足であり、私は聖なる母の聖なる道具であり、老後の安全保障であった。私は母の精神のからくりを見破り、私の精神の恐ろしい真実を知った。私は心の奥底では母を恐れており憎んでおり、この原初的な人間関係の暗黒によって誰も愛することができない。誰にも愛されることができない。症状は母から離れれば自分が崩れるという、脆弱な自我構造と、母から離れれば忘恩の徒として罰せられ

るという恐怖の忠実な表現であったんじゃないだろうか」というふうなことを書いております。患者さんの手記を最後にして終わらせていただきます。時間がちょっと、過ぎたかも知れませんが、どうも失礼いたしました。

司会：ありがとうございました。では次に、池本薫先生にマスコミの視点からということで、お話をうかがいたいと思います。

3. マスコミの視点から 池本 薫

池本：私は情報を送る立場の人間でありますけれども、同時に受け手の立場でもマスコミのありようについて、長年考えております。今のメディア状況というものを一言でいえば、送り手にとっては、極めてマインドコントロールしやすい状況にある。また受けるほうは非常にマインドコントロールされやすい状況にあるのではないかとことを憂いているわけです。学会のシンポジウムですから、あまり価値観をいれないようにしたいと思いますけれども、私自身現場にいまして、新聞社の論説委員としてそういう判断をしております。新聞を読んで毎日テレビの前に座っておりますと、さまざまな情報が入ってきて、確かに物知りになれる。しかし、事柄の全体像がはっきり見えないということもたくさんあります。オウム事件にいたしましても、微にいり細に渡る報道にもかかわらず、「一体宗教とは何か」とか「オウム教団はなんであるか」についてそれほど深く考えたことはないのではないかと。送り手のほうにもないし、受け手のほうにもない。オウムのいろいろな用語を勉強したり、男女関係をよく学びました。しかしそれがどんな意味合いをもつのか。皆目わからないまま情報の洪水のなかで、じっくり思考しないという、そういうふうな状況になっていると思います。マインドコントロールという言い方をしましたけれども、マスコミ学でいえば、これは情報操作というふうなことで言われております。情報操作にはふたとおりのものがあるだろうと私は考えております。それは送り手ではなくて、送り手以外のところ、つまり権力側、ある集団、そういうふうなところから、メディアをコントロールする。要するにメディアコントロールというのがあります。これは戦争においては国家が必ずそういうかたちをとってまいりました。戦前の日本はそうであったし、

最近では湾岸戦争がそうだったと思います。もうひとつはメディア自身の利益のために、あるいは主張のために情報操作をしているという現状がございす。これはメディア自身の利益というのは何かといういろいろなございすけれど、テレビ局では視聴率を上げること。視聴率を上げることイコール利益ということ。スポンサー側にとっては商品が売れることでありますし、大量消費社会を是とする現代社会においてはこういう視聴率主義、それから利益というものに対してなんら抵抗がないというかたちのものであります。従ってテレビ局においても視聴率を上げる番組を作る人間は優遇され、そうでない人間は不遇のまま学習意欲もなくしてしまうという現実がございす。それからもうひとつはテレビ局ないしあるいは特定の人物がある主張を通すためにいろいろなことをする、情報操作するというのもあると思います。前者のメディアが誰かにコントロールされて受け手に流してしまうということにつきましては、先程申しました、戦前厳しい報道管制のもとで、軍部の発表をそのまま流していたという事実がございす。湾岸戦争においては、イラク側の問題は云うまでもないと思いますが、アメリカを中心とする多国籍軍側の我々メディアに対する厳しい報道管制というものが、それに我々は抵抗しながらも結局負けてしまった。テレビゲームみたいだとか、ニンテンドー・ウォーとかあるいは「きれいな戦争」と言われたのは、単なる演出にすぎない。ハイテク戦争であって、軍事基地ばかり狙って市民の犠牲者は少なかったというようなことを言われておりますけれども、実際はそうでなくて3分の2というものは通常爆弾で打ち込まれておまして、イラク全土に爆弾が降り注いだというような証言がでております。新聞・活字のメディアというのはかなり抵抗し、色々な事実をつなぎあわせて全体像をみようとするような報道をしたと思っております。それに対してテレビのほうはほとんどなかった。与えられた映像は結構それでおもしろいということで、映像を繰り返し巻き返し流していた。情報が多いようで実は少ない。僕はたまたま足を怪我してまして、家でテレビをずっと見ていましたんですけども、情報化社会というのは時間浪費社会かと思うほど情報は少ない。軍事評論家なる人々の解説的外れが目立った。それは、入ってきた情報を直ちに推

敲することもなく解説することは人間の能力においてはできないということを証明したともいえます。いずれにしても情報は少ないにもかかわらず一見多そうに見えるものは、映像の反復繰り返しが多いからであります。それによってますます「ニンテンドー・ウォー」になったり「きれいな戦争」になったわけです。テレビはそれに対して反省がありません。テレビは映像があれば勝てるんだ、新聞に勝ったと言っておりますけれども、私は新聞のほうが勝ったというふうに思っております。第一に24時間、四六時中テレビにかじりついているのは、新聞社の論説委員か暇な主婦くらいなものだろろうと思っておりますので、むしろ一日2回見る新聞のほうがはるかにしっかり事実をとらえたのではないかと思っております。映像の繰り返しについて申し上げますと、数年前首都圏で起きました連続幼児誘拐殺人事件のM青年が捕まりまして6畳の部屋にビデオがびっしりうまってる状況がございました。はじめのうちはその映像しかなかったわけですね。テレビ局は放送内容に関係なくその映像で被疑者の情報を流す。そうするとこれはビデオによる犯罪だということを徹底的に印象付けている。映像はイメージですね。イメージ報道に終始しているわけです。これはもって皆が見てくれて、視聴率が上がるからです。

それから何といってもテレビというのは事実を映す、と。映像は事実である、真実である、というふうな一見もっともらしい了解事項が受け手と送り手のあいだにありますけれども、このこと自体が間違っている。テレビは事実のほんのわずかの一部分を、事実の一部分を映すに過ぎない。最近コンピュータ・グラフィック等がございすので、同じようなものを、自分の幻想を具象化することすらできる。それが現実の絵と、作られた絵が殆ど変わらないような状況まで生まれた。過去も現在もそして未来もわからないような映像が流れている。映像に対して、我々は疑問を持たないところに大きな問題があるわけですけれども、それがもてないという、映像というものの魔力みたいなものがあることも事実だと思いません。

次にテレビ局がある主張を通すために何かしたのではないかというケースのものもたくさんあるかと思ひます。表面に現われたものについては、テレビ朝日の元報道局長が、民放連の勉強会でしゃべった

ことが産経新聞のスcoopとなったということで、産経新聞が同業者の足をひっぱったのではないかということが言われていますけれども、そういうようなことではなく、元報道局長の言っていることの良い部分ももちろんあるわけですが、大変な問題である。彼は非自民政権が生まれるように報道せよと指示したか、というふうなことを言っている。これはつまりテレビ局としては望ましくはないけれども、そういう主張も他メディアであればあってもいいかと思います。また、こういう事も言っているんですね。これはテレビの本質を彼がそれなりにとらえたものだと思いますが、「テレビの1シーンは新聞の1万語にも匹敵する」と言っている。「自民党の某氏と某氏が並んでいるところを放送すると悪代官がひそひそ悪巧みをしているようで、自民党の得票がどんどん減る」というようなことをしゃべっている。テレビというものはものすごく威力があるんだということを言っているわけですが、それはどういうやり方かという、イメージを繋いでいって、あるひとつの概念、特定の考え方を作っていこうという魂胆だと思います。これが実際に行われたかどうかについては国会喚問においても、その後のテレビ朝日の内部調査においても明らかにされなかったんですけど、これは私が見た感じでは、テレビ朝日だけでなく他のテレビ局も全部これに近いようなことをやってきた。テレビの強さというのは、本当にこういう形で、イメージをもって武器としている、そこに問題があるというふうに思います。こういうことで映像をつないで、イメージでいくということはまさにマインドコントロールということを超えて、映像ファシズムになっていくのではないかとこの視点も無視できない。

「考えるメディア、新聞」と「感じるメディア、テレビ」なんていうことをよく言います。新聞は冷静に読んで頂けるし、読みたいところを読んでもらえばいい。ためて置いてまとめて読んでもらってもいいし、受け手のほうにすべて権利があって、自由にみていただいて、つつこんで頂いていい。それに対してテレビというのは一方的に流れている。もちろん最近ビデオがあるから撮っておいて、自分流にみるという方法もあるんですけど、なかなかそうはいかない。そうするとテレビというのは一方的な枠にはめた形で走っている。例えば新幹線に乗っ

て車窓の景色を見ているようなかたちになる。そういう意味で新聞のほうが、どちらかという、冷静にものを考えるメディアである。新聞でもそうでないときもあります。時々何かあるときに、大変ヒステリックな表現になり、大変なヒステリックなキャンペーンが行なわれることもあります。もうひとつ、最近、潜在意識に信号を送り込んで操作するという、いわゆるサブリミナルという手法を使った、テレビの、しかも報道番組にそれが登場したということに対して、私は非常に憂慮している。TBSの日曜にやってくる報道特集で、今年の5月に2回にわたって、オウム報道のなかに、麻原彰晃と上佑とかの写真を入れ込みました。テレビというのは1秒間に30フレームある。映画は24コマあります。ヨーロッパのテレビは25フレームになってます。1秒間に30フレームある。その中に1回か2回入れるわけですね。それは我々は認知できない。意識下においては、それが反応していると、アメリカのウィルソン・ブライアン・キイという人が早くから主張しています。知覚できないけれども、実際は潜在意識で認識されて知覚されているというわけです。これはよろしくないということで民放連でもやめることを申し合わせたわけですね。アメリカもちろんFCCがテレビCMは禁止しているわけです。しかしやっていないという証明は難しい。ビデオに撮って全部コマ送りすればわかるんですが、これを応用したCMが最近あるテレビ局にもちこまれた。これはサブリミナルじゃないんですけどね。これは中古パソコンを売っている会社ですが、フレームのなかにいろいろなパソコンをカタログ風にいれこんでいるんです。15秒のCMになってるんですけども、あとビデオテープで見ると、莫大な情報量がある。カタログ1冊分あるわけです。潜在意識に訴えるテレビ手法、CM手法というものは、アメリカでは昔から大変問題になって、みなさんもご存じだと思いますけれども、1975年にドライブインシアターで、ピクニックという映画がありますが、その中に「コカコーラを飲もう・ポップコーンを食べよう」を入れ込んだところ、それぞれ58%、18%の売り上げ増になったということをやっています、この手法は非常に効果があるということが言われています。

映像を中心としたメディアがあまりよろしくないことをやっていることに対してどうするか。受け手

のほうはどうするかということでありませけれども、それはやっぱり映像というのはそういうものだという、割り引いて考えることが大切だろうと。それから映像漬けにならないことが大切だろうと。それから小さいときから映像読解力を小学校辺りから身につけることだ。ただ映像を使って勉強するんでなくて、映像の持っているそもそもの性格とか問題点というものを勉強して、実際に自分で映像でものをつくって取材して流してみても、いかに映像が虚しいものであるかということがわかってくると思うのです。私が、テレビ局から新聞社に移ったとき、驚いたことですが論説委員の年寄りがテレビを、ワイドショーなんか見て感心するんですね。すごい、おもしろい、と。それはテレビ局にとっては苦し紛れのやり方です。取材現場というものを我々全然知らないわけですから、行った人しかわからないわけ。その一部を出しても全体に見えるわけですね。だからけっこう喜んでいてとんでもない勘違いをしている。「あいつは目付きが悪かった」「しゃべり方がなんとなく落ち着きがなかったからあいつは犯人じゃないか」みたいなかたちで伝わっていくんですね。とにかくすべてのものに対する、批判的な精神、批判的思考とかクリティカルシンキングということがまず第一だろうと思います。それからテレビ局においては営利中心主義の体制を打破しなければ絶対いけない。産業としてのテレビが論じられて、そればかりクローズアップされて、文化としての、ジャーナリズムとしてのテレビというものがまったくそっちのけになっているという現状があります。実際はテレビで働いている人間は、そういう人間は少ないんですけども、入ってきたときはものすごい勢いでやるんですけども、そういうふうにだんだんくなっていく。それは待遇とか、いろいろな面から経営側に問題がある。企業は利益を生まなければいけないという問題はあるにしてもですね、いろいろ矛盾を抱えながらもどう生きるかが人間だろうと思いますので、その辺を気をつけるべきだろうと思っています。

司会：ありがとうございます。それでは最後に、岡野守也先生から、宗教の視点からお話をうかがいます。

4. 宗教の視点から 岡野守也

岡野：岡野です。いろいろ深いお話や、迫力のあ

るお話のいちばん後にまわされまして何を話そうかなと思ってますけれども、短い時間ですから要点だけをお話したいと思います。恩田先生もおっしゃったんですが、マインドコントロールという言葉を使う場合に、限定された意味と広い意味とを区別しておく必要があると思います。限定された意味でのマインドコントロールというのは、いうまでもなく、ある特定の個人やグループが自分のさまざまな利益のために、当人がコントロール、利用されているとは気付かないようなやり方で、というのがひとつのポイントだと思います。それからその当人の心、とりわけ深層という部分にはたらきかける技法を使ってコントロール、利用していくことというふうには定義できるだろうと思います。報道の問題としていうならば、「マインドコントロール」という言葉はそういう限定された意味で使われてきていますし、実際、限定された意味で使ったほうがいいたるうと思います。

マインドコントロールの問題の難しさというのは、まわりから見ると明らかに利用されていると見えるにもかかわらず、当人は利用されていると思っていないというケースが多い、ということにあると思うんです。それからさらに問題を複雑にしているのは、場合によってというか僕の見るかぎりしばしば、利用している側も少なくとも意識的には利用していると思っていない、というケースが相当多いような気がするんです。利用している側も、本人のためだとか、神仏のためだとか、真理のためだとか、正義のためだとか、思っている。ですから利用している側も利用されている側も、お互いに利用している・されているとは思っていないにもかかわらず、いわば客観的、外側の立場から見ると、どうもそれはおかしいというふうに見えるケースが非常に多い。そこにいちばんのポイントがあると思うんですね。

そうした問題の中に現われているいちばん根本的な問題は、人間の心にはいわゆる意識とか理性とかいうことだけでは、対処できない、情念とか信念とか欲望とかに関わる、心理学用語で言えば深層心理というか無意識というか、そういう領域があって、いまさら専門家のかたが多いと思いますから申し上げることもないという気もしますが、20世紀に入って深層心理学や臨床心理学というものが誕生し、それ以後、100年近く発達してきたといえれば発達してき

たんですが、それでもまだ私たちは日本社会全体というレベルで、人間の深層というものに対してどう対処するのか、社会的に広く合意された基準とか方法というものを十分にもっていない、というところにいちばんの問題があるのだと思います。ですから宗教というのは、当然人間の意識の問題だけではなく、無意識の願望であるとか信念であるとか、そういうところに関わる問題なわけですけれども、それにどういうふうに、社会全体として対処していったらいいか、まあ要するに戦後の宗教の自由というかたちではほとんど方法も基準も持ち得なかった、と。そこにさまざまな問題が起こってきているのだというふうに私は見えています。ですから意識や理性のレベルだけではなく、無意識のレベルも含めて、人間というものをどういうふうに見、どういうふうに対処していくかという、基準と方法を社会的に大きく合意されたものを形成していく必要がある、それが日本の基本的な文化状況ではないか、と。ちょっと話が大きいんですけども、そういうふうに考えています。

これも恩田先生もご指摘になりましたけれども、マインドコントロールというのは人間にとってはある意味では不可避のものだ、と。広い意味のマインドコントロールですが、一方的な利用を意図してではなくて、当人の利益であるとか癒しであるとか救いであるとか、あるいは精神的成長とか、能力開発とか悟りとか、というふうなことを少なくとも意識的には意図して、そして他人の心に働きかけるといことは、これはあらゆる宗教がやってきたことであるわけですね。それからその意味をもうちょっと広げて、今言いましたような精神的成長とか能力開発というような言い方にしてしまいますと、これはあらゆるセラピーや教育活動が現にやっていることであるわけですね。ですからそういう広い意味でのマインドコントロールは、人間の生活に不可避といていいと思います。

つまり人間というのは生まれてすぐ本能によって自分の行動をほぼ決定できるような動物ではありません。親、保護者によって心をコントロールされながら次第に自分で自分をコントロールできる存在に成長していかなければいけないという宿命を背負っていますから、親や社会的に指導的な立場にある人間は、やはり子供や生徒や患者を指導せざるをえな

い。つまりマインドコントロールせざるをえないわけですね。そういうマインドコントロールというか、ある人間が他の人間の心、とくにそれも信念や願望やそういうふうなものに関わる部分に働きかけをせざるを得ないというのが人間である。その場合にそういうふうな働きかけが是認されるかどうかということの基本的な基準は、言うまでもないことなんです、原理だけ言えば非常に簡単なことで、実際に当人の利益になることが、当人にも自覚されて、それからまわりにも自覚されている。つまり同意・承認・確認というふうなことが当人にもまわりにもできるかどうか、ということが基準になってくると思います。

そういう当人にもまわりにもそういうことが承認、同意できるかどうかということについて、こと宗教に関しては放置されてきた。というのが最近起こっているさまざまな問題のひとつの大きな理由だろうと思うんですね。

しかしこの問題はさらに言いますと、当人もまわりのほとんど承認、同意している場合でもその人々を含む社会全体とか国家全体とか民族全体が、のちの時代から見ると間違ったことをやってしまうということも有り得るわけですから、そういう意味で言うと広義のマインドコントロールの問題は、掘り下げていきますと人間が心を持っているということ、それから他の人の心に影響を与えざるをえないし、それから他の人から自分の心に影響を受けざるを得ない。そういうことは避けられまいといういわば人間のコミュニケーション的な、しかも深層コミュニケーション的な本質に関わる問題で短い時間で論じ尽くすことはできませんし、ただちに皆さんと合意できるような答に到達できるとも思わないんですが、ここで時間のこともありますので、私に頂いたテーマが「宗教」ということですから、宗教に限定して、お話し合いの叩き台という意味で、いくつかのことを述べさせていただきますと思います。

私はいま宗教がいろいろ論じられるなかで、ほとんど見過ごされているポイントがあるというふうな気がしてなりません。それは従来「宗教」という名前前で呼ばれてきた人間の営みのなかには、非常に大まかにいって2つの側面、2つの区別すべき側面が含まれているということです。ひとつは特定の教祖であるとか教義・修行法・儀礼それから教団という

ふうなものを絶対視することによって安心だとか安定感だとか所属感であるとか、愛されている、認められているというふうな感じだとか、人間的・精神的な成長とか、癒しや救い、非常に大まかに言ってしまうと非常にポジティブな心の状態を得る、と。そういう側面ですね。これはそれを得ている本人にとってある意味でポジティブに感じられているわけですから、どこが悪いんだという話になりかねないんですが、これはその基本的な構造として「自分たちが絶対に正しい」と信じ込むというふうな意味での、絶対化された信仰によってなりたっているわけですね。そういう意味での自己絶対視、自己絶対視的な信仰によって宗教がなりたつという面がひとつあると思います。そういう自己絶対視にもとづく宗教の害悪というか罪悪、これは近代のヒューマニスティックな進歩的な思想家たちによってかなり徹底的に批判されてきたわけですし、その批判のかなりの部分は当たっているというふうには私に考えています。

そうした当然批判されるべき宗教の側面といえますか、そういう側面の大きい、強い宗教を、私はここで、いわば他者とか他の宗教や思想とか、あるいは批判的理性とか、そういうものに対して開かれた姿勢をもっていない、自分たちだけの世界に閉じこもっている、そういう意味で「閉じた宗教」というふうに呼んでおきたいと思うんです。ですから、宗教と呼ばれてきた現象のなかには、ひとつ「閉じた宗教」というものが必ずあると思うんです。

しかし、それが宗教のすべてかという、それはまた、全く違っていると思ってまして、もう一方、宗教と呼ばれてきた人間的な現象のなかにもられるものは、人間というものがどう考えても人間を越えた大きな何ものか、それを仏と呼ぶか神と呼ぶかブラフマン、アートマンと呼ぶか、道と呼ぶか、あるいは精神性を含んだ意味での全宇宙と呼ぶか、その言葉は実は大した問題ではないと私は考えてまして、とにかく大きな何ものかによって生かされて生きている。そしてその大きな何ものかと一人一人がつながっている。それはまたすべての人、すべての生きもの、あるいは生きものだけでなくすべての存在がその大きな何ものかによって包まれている。そしてすべてが包まれているという意味で、すべてがつながっている。そういうふうなこと、これは私は

みればみるほど事実だという気がするんですが、そういう事実の深い直観・自覚という側面が含まれているというふうに考えています。それを伝統的な仏教的な用語を使うならば、悟りとか覚醒とか呼ぶでしょうし、そこからでてくる基本的な心、生き方の姿勢を愛とか慈悲とか呼ぶことになると思うんですが、そういうところにこそ宗教の本質的な意味、今日の人間にとっても普遍的に意味をもつ中核があると思います。これまで人間がそうした事実、大きな何ものかに包まれているという事実を体験して、しかし特定の文化状況とか個人的な限界をもって体験しますから、それに対してある特定の名前をつけるとか、それに関わって特に古代の人間であればそれに関わるさまざまな神話を形成しますし、それから科学的あるいは哲学的にまだ洗練されてない段階であれば、ある特殊な教義を形成していく。それに基づいてさまざまな儀式や修行法や教団を形成してきた。というのが基本的にいうと諸宗教の歴史ではないかとみているわけです。

今も言いましたように、現代のとりわけ哲学・心理学・深層心理学・宗教学などの知見を入れながら見ていくと、そこで形成された神の名前であるとか、神話であるとか、そういったことではなくて、むしろそういうものによって表現された直観・自覚、その体験こそが重要なのではないかと考えています。その自覚体験というのは人間の心を他者や世界や宇宙に向かって開いていくという性格を明らかに持っています。そしてそれは教義とか神話とかにこだわることさえなければ、理性的探究・批判に対して十分開き得る心の姿勢であるわけですね。私はそういうふうな側面を非常に強く持った宗教、あるいは宗教のなかのそういう側面を「開いた宗教」と呼んでおきたいと思います。

もはや教祖や教義や教団というものを自己絶対化しなくなった、それから理性的・科学的な探究に対しても、それから他の思想的・宗教的な立場に対しても完全にオープンになってしまった、と、そういうふうな立場を宗教と呼ぶかどうかという話もでてくるので、私はむしろ最近ではスピリチュアリティ（霊性）と呼んだほうがいいのではないかと考えて、最近いろいろなものを書いたりしゃべったりという時には、「宗教から霊性へ」というスローガンを語っているんですが、しかし宗教という現象をとらえる

上では「閉じた宗教」と「開いた宗教」というふうな言い方がいいかもしれません。

もちろん具体的な個々の宗教、そしてその宗教の営まれている現場では殆どの場合この2つの側面は混在しているというふうに私は見えています。そういう意味ではむしろ、「閉じる宗教性」と「開く宗教性」というふうに言ったほうがいいのかもかもしれません。

しかしともかく、こういうふうな「開いている宗教」「閉じている宗教」あるいは「閉じる宗教性」「開く宗教性」という目をしっかりとをもって、具体的な宗教現象を見ると、ある特定の宗教が基本的に閉じる方向に向かっているか、開く方向に向かっているかというのは、教団の宣伝といえますが美辞麗句に惑わされず…、あらゆる宗教教団は自己賛美をやりますから、その自己賛美の言葉に惑わされず、実際にやっている実践活動の方向・性格を冷静に観察すると、閉じる方向に向かっているか、開く方向に向かっているかは比較的容易に見分けることができるのではないかと考えております。

ですから、宗教だからいいとか宗教だから悪いとかというふうな発想をやめて、あらゆる宗教のなかに閉じていく方向と開いていく方向がたぶん混在している、ある特定の宗教の実際の行動を見ていると、閉じる方向が強い教団と開く方向が強い教団とがある、というふうに考えたほうがいいのか、というふうに考えております。宗教でなくても、人間のあらゆる集団は、特に思想に関わる集団はどうしても自己のなかに閉じていくという危険はいつも持っていますから、宗教だけの問題ではないと思うんですね、本質的には。ですから人間が特定の思想を持って集まるあらゆる集団が開く方向に向かっているか閉じる方向に向かっているか、という視点をもって見るならば、それに自分がどの程度関わるか関わらないかということの比較的妥当な判断ができるのではないかと、私は見えています。

そういう2つの宗教ないし宗教性を区別したうえで、広義のマインドコントロールの問題に戻って、1点だけ申し上げますと、言うまでもなく問題のポイントはマインドコントロールというものがいいかどうか、どこまで許されるかということではなくて、働きかけ、コントロールが心を開かせる方向に向かっているのか、閉じさせる方向に向かっているのかというところにある、と言っていていいと思います。話題

提供ということですから、きわめてシンプルな言い方を申し上げておきますけれども、心を開いていくための心のコントロールというものは有益かつ必要である、と。心を開ざしていくような心のコントロールは有害かつ無用であるというのが、非常にシンプルな結論になると思います。

もちろん後で、じゃ心を開くとか閉ざすとかいったことが、もうちょっと具体的にはどういうことを意味するのか、とか、誰がどういう資格で、どういう方法や制度でそれを判定したり対処したりするのか、といった問題をめぐって議論がありうると思います。先ほども申し上げましたけれども、たとえ開かせる方向にあると指導者の側が思っている、指導を受ける本人が事前に十分な情報を得た上で、そして主体的な判断によって同意している、ということが広い意味でのマインドコントロールが行なわれる時の、大前提だと思います。これが従来の宗教や、それからさまざまな心に関わっていま問題を起こしているようなトレーニングの団体なんかの問題だと思います。あらかじめ「ああしたら、こうなって、こうなったら、ああなって、そしてこういう問題も起こり得るよ」というふうな事前の情報提供を決して十分に受けていないところで行なわれている。それから途中で「おかしいな」と思ったらいつでも拒否できる、抜けられるというふうになっていないというのが基本的な問題だろうと思います。

そうした問題も含めて、他のシンポジストの方や会場の方と、今言ったような宗教というものを見るときに「閉じた宗教」「開いた宗教」という見方をすること、そういう考え方がどのくらいみなさんと、考え方としてどのくらい共有できるか、というふうなことをまた後でお話をさせて頂ければと思っています。ありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。これで4人の先生方からひととおりの話を承りましたので、少し休憩をとりたいと思いますが、そうですね、時間があまりないので、4時10分から始めたいと思いますが、よろしいでしょうか。それまでちょっと休憩をいたします。それから後、補足をしていただいて、その後フロアのひと、いろいろ質疑応答をやりたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

司会：それでは時間が参りましたので、これから。続けたいと思います。まず、各先生方からちょっとまだ話し足りなかったことがございましたら、長くても5分以内でお話を承りたいと思いますが、高橋先生いかがでしょうか。

高橋：高橋でございます。先程ちょっと、申し遅れたことがございます。マインド・コントロール教育におけるマインド・コントロールは、教育現場では特に先程私高校のことを強調しましたが、中学辺りでは最近これは公立でもそうなのですが、いくつかの学校、地方へ行きますと大変問題となっているケースがございます。実は、教師の資質の問題にかかってくるわけですが、この、児童生徒に学習指導上の中でいろいろと行なうという、これは学習効果を挙げようという教師側の態度なのでしょうけれども、受ける側としては、かなり強く受けてしまう。最近、自殺の問題がいろいろあるのですが、あれは裏を返すと、自殺は非常に大変難しい問題があります。これは心理サイドの問題、心のコントロールと申しましょうか、これで結構問題になっているのです。それは新聞紙上で、報道されるのとテレビ、先程問題がございましたけれども、池本先生のお話ではございませんけれども、あのメディアの問題で、かなり違った捉え方をしていくという、これで学校教育現場の問題との食い違いがあるのじゃなからうか、実際このいじめの問題、それから不登校の問題とかいろいろありますが、教師が行なうマインド・コントロールというのは、学習効果をあげようとしてやる場合と、そうではない場合というのがあろうかと思えます。その辺は、極めて捉え方によって難しいってということだと思います。いずれ先程申しました高校の2のケースでも完全にこう生徒の方が、受けてしまって、そのまま、ですからその、必然的に生徒がそのままにこう入って、気が付いてみることもできなく、自殺したのは最後は自殺の原因ではないという学校側の答弁なんです。教育長のほうはそんなこと言って、これも大変難しい問題で今後尾を引くのではなからうか。こう言うことで、マインド、この心のコントロール、教育現場で行なう問題は、大変微妙なものがあるのではなからうかと、思えます。そういうことでこの受け止め方、捉え方が非常に難しいのではないかと。やはり、こう児童生徒という問題で、大人ではございませんので、その辺

のかかわりあいはどうなのだろうかということですが、非常に難しいという様なことで終わりにします。

司会：では柴田先生おねがいします。

柴田：余り付け加えることもございませんけど、ちょっとここで誤解を受けるといけませんので、今日人格障害の人たちの臨床例で、ただ理論じゃなくて経験からを通してお話ししたんでこういう例は非常に多いのが事実です。ただし、彼ら達だけが特殊な人格の持ち主であって偽りの自分で生きてる彼ら達だけがそうかというとならなくて、われわれもそれに近いなんらかの偽りの自分を、サララップぐらいの薄いベールで包んだ部分は持っていると思います。要するに自分自身との和解、人間社会との和解、こういうのが偽りの自己で生きているという人格障害の人が特にこれができにくい。それですから人間社会に対して、大変反発がある。まっ、あー私は今日は心のコントロールということでは言いました。マインドコントロールという言葉も出しましたんで言いますが、こうなるとなるとこの人たちは非常な怒りをもって、人間社会に対してのこういうことが、いろんな社会に対するさまざまな、この間の様なサリン事件とか社会、他者への攻撃という問題になってくると思えます。すると、何か原点は母親にあるんじゃないかと、実は母親とその中の支配下にある、これはノイローゼの場合であれば、甘えの問題で済んでそこから脱却できるものですが、今度は母親の愛着が強くてその支配下にあったことさえも、支配下の中に入ってしまうと、自分の存在がなくなって飲み込まれてしまうか、かえって母親に対する反発がある。それですから、実は愛着がありながらも猫とか何か他のもの、えーその年代に応じてそういうものになっていくと。それがやたらにお勉強家であったりとか、宗教に飲み込まれてしまう形とか、そういう形を取ってしまうこととなります。その他には、これだけの問題ではなくて、これは今日は内面の問題から話してきましたが、決してこれは空想の世界でもありません。ただし、その他には人間というものはまだまださっき言いました様な、健康と言われる我々も、一応サララップぐらいでありますんで、そこらはやはり、池本先生がマスコミの立場からもおっしゃいましたけれども、やはり外部からの影響というものもこの人たちは受けやすいし、また非常に外部のこともこれは刺激つ

てのは非常に大切なことだと思って私拝聴させていただいた次第でございます。

司会：ありがとうございます。それじゃあ、池本先生何か補足など。

池本：一つ欠落していたことがございますんですが、それは、やらせという事についてです。NHKの例のヒマラヤムスタンのドキュメンタリーでは、高山病を演出したり、あるいはこの流砂現象を石ころを転がしてつくったわけです。これに近いことは日常にもかなり各テレビ局で行なっている事だ。歴史の再構成ものがありますが、これはもう再現そのものでありますからなんら問題はないんですけども、ドキュメンタリーというのは事実そのものだという前提にたつて、放送していると観ている訳ですから、イベントングリアリティーっていうかな、事実をつくりあげちゃうっていうことは、許せない行為だという風に思っている訳です。やらせはニュース及びドキュメンタリーにおいては、断じてあってはならないという風に私は思っています。私自身は、ドキュメンタリーは海外で数本つくったことがございますけども、確かに行ってみれば東京で聞いた話は全然現地にはない、過去にはあったという場合、どうするかという事に必ずぶつかり、その場合にはどうするかといえば、フィルムをオーバーラップするとか色々な手法を使って、これは明らかにあのフィクションですよという風な断りをつくってやっていたと思います。それから、ほとんどの場合はですね、事実が生じるまで待つというのがドキュメンタリー作りの精神だ。

いまは、効率主義が目立ちます。海外取材を二ヶ月で終わりだとかですね、そういうことになって昔は半年一年粘る人だっていた訳ですね。そういうことで一つの事実に対する執念深さというものが無くなっているということの一つ申し上げたい。それから、もう一つはキャスターというものに対する誤解です。テレビ局はキャスターを神様みたいにオールマイティーな人間に仕立て上げようとするわけです。そうすることによって、あれはすばらしい、あのニュースを見ようと、最近は何々さんのニュースみたいになってますけども、そんなことは絶対にありえないです。テレビの作業というのはすべて集団作業であり、原稿をつくる人、コメント一つについてもつくってある。それを如何にもアドリブであるかの様にし

て、一人の素晴らしいオールマイティーな人間を作り上げることによって、視聴率を上げる。テレビの作り方の作業の中身をもっともっとテレビも開示すべきだという風に思います。

司会：ありがとうございます。それじゃあ岡野先生。

岡野：はい。皆さんの話を伺いながら、感じたことを一つ付け加えさせていただくと、教育の現場でも医療の現場でも、それから言わば情報流通の現場でも、基本的に、人間にとって自由というのは、どういうことを意味するんだらうか、どういう自由が許されて、どういうのが自由ではなくて放任なんだらうかっていうことについて、戦後日本の文化の中できちんとした合意が形成されていない。それがあらゆる分野に現われているんじゃないか。したがってある特定の心を操作する技術を持ったり、意図を持ったりした人間が、それをやる時にそれを根本的に規制する倫理観とか法律とかいったものが、日本文化の共有財産としてほとんど形成されていないんじゃないか。だからそれをどういふふう形成するかっていうことが、基本的な課題なんではないかなって感じを抱きました。

*** 質疑応答 ***

司会：ありがとうございました。これで一通り話題提供者の先生方からのお話を承ったわけでございます。それでは、フロアの先生方からこれから、しばらくの間、いろいろご意見、それからご質問がございましたら承りたいと思います。その時発言される場合、マイクを持って行きますので、ご所属とお名前、できましたらお願いしたいと思います。どうぞ、ご遠慮なく。

質問者：駒沢大学の中村と申します。恩田先生がいちばん始めおっしゃいましたけれど、あの他者のコントロールと自己のコントロールという、あの二つの側面がある。私見なんですけど、あの自己のコントロールっていうのは、あの自己の治癒力、あるいは自己の回復力と申しますか、あるいは究極には自己実現と申しますかそういうものに関係してくるというふうには私は考えております。あるいはその、柴田先生がおっしゃった自分自身との和解もやはりセルフコントロールのこの過程っていうか、プロセスの中で現われて来るものじゃないかというふう

考えておるんですが、そこでこれはまあ原則をお聞かせいただければと思うんですけど、例えば良いコントロールと悪いコントロールと分けるとします。その良い悪いっていうのは何かというと、結局良いというのはですね、自分の健康あるいは成長あるいは社会にとってプラスになるという、これを良いコントロールというふうに呼びますと、悪いコントロールはその反対なんです、その悪いコントロールを受けないようにするにはどうしたらいいかという原則ですね、これをですね、先生方にお伺いしたいということが一つでございます。二つ目はですね、仮にですね、自分が悪いコントロールを受けたというそういう認知があればですね、認知があるという、自分でそういうことがわかった場合に、それからどうやったら脱却するかというような、原則でございます。こういう事をお聞かせ、願えたらと思うんです。以上でございます。

司会：非常に基本的な事ですが、マインドコントロール、悪いコントロールですね、こういうものを防ぐにはどうしたらよいか。それから、もう一つ自分がかかっているとわかったら、どうして脱却できるか、という二点なんです、その点について先生方からご意見ありましたら、どうぞご自由にお願いたします。

柴田：私はさっきの続きで、今日は人格障害のそちらの方が大変多いんで、そちらの方から言いますと、本人達は我々が悪いコントロールだなと、それだけ本人が不安定な状態になっていて、中身が何も無い、心の拠り所がないとかいう、いろんなものをもちながらも、これを何とかしてくれと、患者さんはそういうふうにおっしゃってきます。しかし、患者さんがそういうパターンで、これが自分の構造になって、人格の構造になっていく。今度はいちばん向こうの先生もおっしゃったんですけども、自由とは何ぞやということもちょっとでたんですが、今度治療していく過程において、今度はそのパターンが一番なれているから、その我々から観たら悪いコントロール、向こうにとってはそれが一番困るから、困るんだって言いながらも自由になって行くことが恐ろしいということが、これ病症利得抵抗とでも、パーソナリティがこう変わってくる。今まで思っていた存在が変わってくる、これに対する問題が出てくるんで非常に長い道のりをとってくる。今

までの人生観が変わってくることになります。そこらの問題が一つは出てくるんじゃないかなと、それともう一つはマインドコントロールを解くって、解くということをよくやる、どうやったら解けるだろうかっていうのは、精神科に来る患者さんのそういうパーソナリティの問題の人は、これは大変な奥ふかい所、内奥に横たわった、実は本人は意識してない、ここに母親との愛着の中で支配下にあるわけですから、その前には支配下に自分だけが置かれていることによって満足している、それですから、初めに弟とか妹とかかわいがられていると、イメージの中では、母親いや、妹殺しとかお兄さん殺しとか、何しろ自分が母親を独り占めするというふうな、ちょうどオウムで言えば、導師を独り占めしたいふうに位を上げていこうとする。そういうところから、彼らにとっては、長い道のりを辿るもので、先の手紙で、じゃなくて、患者さんが書いた手記のようなもので、ちょっと返事にはなりませんかもしれないけど、そんな感じが臨床の方からで致しますけれども。

司会：今の柴田先生の話はいわゆる精神科医として、深層心理の面で深いところだったんですが、そのそれよりちょっと浅いところの問題もあるわけですね。それで、そのような問題はどうでしょうか。他の先生どなたか。普通、ちょっとお考えになってみてという意味で。これはいわゆる深層心理学的な深いところの一つの問題を、取り上げられたんですが、ちょっとその前に普通あのいわゆるマインドコントロールを防ぐには、解きかたっていうのは、よく言われている問題でもあるし、それから我々も聞いている問題なんです、岡野先生何か、あるいは池本先生。

岡野：えーと、僕自身が、外から見ると、何とか教じゃないかと思われるような瞑想の指導をやったりしていますので、とても難しい問題だと思うんですけども…。まずとても常識的な事なんです、二つないし三つあると思うのは、とにかく当人が批判的理性をしっかりと持ち続けるという自覚ですね、それを持っていて欲しいというのがあります。ただ、これは後で補足で言いますけど、教育の問題がありますので、ちょっとそう言われても、言われた当人が理性的になるとか批判的になるとかっていうことが、どういうことなのかよくわからない、訓練

受けてないっていう、今の学校教育の根本問題があると思うんです。それからもう一つは、社会的な常識をばかにしないっていうことだと思うんですね。やっぱり、常識は常識として結構通用してるものでそれは大切にします。それからもっと大事なのは、なんて言うか、これが多分一番微妙で短い時間で語り尽くせないと思うんですが、自分が一応感じてる事とそれから本当に自分が感じてる事っていうのはレベルが違うようなんですよね。ですから、自分がいったい本当には何を感じているのかっていう、自分の深い意味での感性を深めたり、それから基本にはそれを信じるということ。その三つくらいのことが必要だと思うんです。けれども、これは実際問題としていうと、今の学校教育ではこの三つについてほとんど何も教えてない。そういう教育・トレーニングを受けてない子供や若者に向かって、気を付けなさいと言ってみても、なかなか難しいなあというのが、僕の感じで、個人の努力としてはそういうことだと思うんですが、やっぱりもうちょっと成人の側、大人の側の社会教育の努力、それはマスコミも含めて、これからやっていかなきゃいけないだろうと思っています。それから、悪いマインドコントロールを受けちゃったなあっていう自覚が起こったときに、一番大事だと思うのは二つの点です。悪いマインドコントロールでも受けたくなくなったモチーフ、基本的な自分の一番深いところの欲求というのは、これは肯定すべきものだっていう自己肯定をはっきり持つ必要があると思うんです。つまり、人間成長とか、自分の潜在能力を開発したいとか、それから自分をほんとに受入れてくれる集団が欲しいとか、こういうふうなものは人間にとって本質的な欲求ですから、そういう欲求によって行動したっていう、その自分に対する基本的な肯定がまず先に必要だと思うんです。にもかかわらず、その具体的な方法を間違えちゃったんだと、だから自分自身の根本的な動機は悪くない、けれどもその実際の方法については自分とっても社会にとっても色々トラブルを起こす方法を選んでしまった、という認識ですね。その認識の時にもさっきと同じ事ですけれども、深い意味での感受性というか自分自身の深い意味での感情に素直になるというか、本当には自分が何をしたいのかをしっかりと観るといふか、そうするとかなりのところは自然に道が開けてくると思います。と言っても実際の

現場では、色々な新宗教に行ったり来たりという方も、僕自身のワークショップの参加者にたくさんいますし、そういう人たちと接するときにはあの実際の場面はそんなに簡単ではありませんけど、原則的にはそういう形で接しているうちに、だんだん抜けてくださる方が七、八割、でもどうしても抜けない人もおられますし、抜けないどころか僕のワークショップに熱心に通った人がある人から聞いたらいつの間にか、何とか教の幹部になっていたということもあつたりして、なかなか難しいなと思っています。

司会：はい、他によろしいですか。

高橋：今教育の面の方の関係がでましたので、ちょっとその辺で、マインド、悪いマインド・コントロールがかかり易い生徒というのは、中高校生を中心に私は大学関係はあまりしてないんでわからないのです。実際に感じとって見た生徒をあげてみたいと思います。これは、入り易い子の入り易い性格ですが、これは性格的に抵抗力が無い生徒、それから自己に弱いところがある生徒、悩みを持っている生徒、不安を持っている生徒、大体こういう生徒が入ってしまうという、ですからこれは相談の中で気付きが出て、自己に気付きが出て、それが解けるようになったというのが事実あります。教育関係でもこういう相談関係でも事実あるわけです。ですから、先程申しました高校生の関係の問題では、面接をしている間にだんだん気付きさせて、カウンセリングの効果というのでしょうか、そういうことが言えるのではないかという気がします。しかし、色々情報操作先程からもでてますが、情報操作によって自己を失ってしまうような生徒にはなかなか難しいです。時間がかかります。ですから、如何に自律性とか自己決定性とか自己責任性を失われたのをもとへ戻すかというのが、やはり相当な時間がかかる、これはやはり特に心のケアというのが必要です。それにはカウンセリングが必要じゃないかなという気が致しております。

柴田：今日はどうもシンポジストに媚びてばかりいるようでいけません、今度は岡野先生が見事に私が話しました深層の精神分析的なそちらのほうから、無意識のところの話しをしたようですが、実はそういう問題が日常の中でどういうふうに出てくるかっていう時に、この人格障害をだした訳です。実は彼ら達が岡野先生がおっしゃった感性を持たな

い、それですから自分の言葉を持たない非常にお礼口だけれども、知識とかそういうのは素晴らしく学校の先生から習ったり書物を読んだりとか、しかしそれは自分の言葉ではなくて借りものであるけれども、借りものでも本当はそれが自分だと思って、そこに感性が無くて自分の語り口というものが実は持ってない。しかしそれに気付いてないこういう形なわけです。それですから、非常にこの感性が埋め込まれたままで、そのくらい実は根本のほうでは飲み込まれた形で、乳幼児期でいえばそう言うのと深層になって面白くないかも知れませんが、実は飲み込まれた形だから自分っていう発想がない。そういう人たちが青年期の人なんかよくいますけど、友達といるときは楽しいんですけど、しかし楽しいようにしてながらも話していることはお互いにわかるけれども、何となく心がずれてるなあー、友達たちとおんなじ年齢なのに何か心がずれてるなという感じがするっていうのが、向こうは自分たちの感じで話してるんだって思う、こっちがそういうのは週刊誌とかいろんなものを読んで知識で話しているだけで、実はそこまでの成熟ができてない感性がない、そこらがあるように思いますね。そういうことでございます。ごめんなさい。

司会: はい、ありがとうございます。えーとそれではどなたか他に。はいどうぞ。

質問者: 東京国際大の志津野と申しますが、三つ聞いてよろしいでしょうか。その一つはですね、あのカルトと宗教の区別で、わたくし今学生部長をやられてるもんですから、カルトのカルト汚染予防、予防しなきゃいけない。学生に説得するのに宗教とカルトの区別、どういうふうにしたらいいのか。もうちょっと具合の悪いことに私は聖公会の信者なんです、カルトの定義をうっかり間違えますと自分を否定するっていうことになって、それからこれ非常に難しいんで苦慮しております。一つ教えてください。それから、言葉使いなんですけど、マインドコントロールってのはこれはマスコミの概念あるいはそうじゃないんだけれども、マスコミから広がってきた概念でそれを使うと麻原の顔が出てくるわけなんですけど、マインドコントロールって言葉遣いってのは果たして心理学で使っているのかどうか、少なくとも広い意味のマインドコントロールはマインドコントロールじゃなくてアレンジメントみたいに使っ

たほうがいいんじゃないかな、ちょっと思いました。これが二番目で、三番目はあのマスコミなんですけど、いろいろマスコミのコントロールって目に見えてるわけなんですけど、特にNHKはそうじゃないと思うんですが、民放のですね取材の仕方、でこれあの一悪しき定番の取材を相変わらずやってます。それであることを追っかけるのに、取材できないにもかかわらず取材しているように自分の声を入れちゃってるわけですね、あれは取材してないんです。取材しているようにみせてるっていうのは、そうやってちゃんと情報を取ってるんだってことでコントロールしているわけですから、あれはおかしいなあって思ってます。それから、同時に取材の仕方は色々あると思うんですけども、特定の好ましい人間だけピックアップして取材して、これは世論であるっていうふうに持っていくと、何かその取材に関するそのマスコミの何か協定とか取り決めみたいなものはそろそろ出てもいいんじゃないか。この三つなんです。お願いいたします。

岡野: あの一、すごく微妙な難しい問いかけをいただいて、どう答えたらいいかなあと思ってますが、でも大体僕は結局は率直にしかものを言えない人間なんですけど…、えーカルトと宗教は厳密には区別できないと思います。で、カルトというのは、宗教の持っている閉ざす方向性を極限に向けたものであって、開いているはずの既成宗教の中にも同じ体質はほとんど残っていると思います。したがってそういう意味で、ここからここまでがカルトでここからここまでが本当の宗教だというのは、完全には分けられないと思いますが、ただ現象形態として一応分けることができる指標は、教祖及びその教義を自己絶対化してるかあるいは絶えず議論の対象にすることが可能だというふうに、特にリーダー達がそういう態度をとっているかどうかは、指標になると思います。ですから、いわゆるカルトに分類されるような教団の方たちはやっぱり、教祖批判とかそれから教義に対する批判は、基本的なところで決して受け入れませんね。ところが既成宗教の特に柔軟な指導者の方たちには、とにかく疑えるまではとことん疑っていいんだよ、と私自身疑った果てにこの信仰に到達したけれども、あなたに強要するつもりはない、というふうな姿勢をお持ちの方もおられて、そういう宗教家は比較的信用できるなど。で、今の状況で

言いますと、多分全世界的な意味で言うと…何か話しが大きいんですが…人類が個々の宗教を抜けて普遍的な靈性にどうやって至るかっていう課題をしょってるのが現代だっていうふうにみていまして、それを明治維新に例えると、脱藩をして明治維新をやるうとする人も、在藩で維新をする人を支える人も、依然として維新反対派もやっぱり宗教界の中では残り続けるだろうと。でも方向としてはやっぱり在藩脱藩を問わず、開かれた宗教性へというふうな気持ちを強く持つてる人たちが、これから行動も発言も本格的に社会的な信用を勝ち取れるまでに、特に若者たちの支持を得られるところまで頑張るしかないというのが、基本的に思うことです。僕自身、絶えずそういうことを問われてる立場として言うんですけども、「お前そうやって生きてるのは、おれにとっては説得力ないよ」って若い子に言われると、もうちょっと何を言っても仕方がないので、生き方で見せるしかないなっていうふうに思ってますが。

池本：重要な問題なんですけどもですね、まずNHKと民放の違いということをご指摘になりましたけども、ニュース、ストレートニュースの番組についてはNHKも民放も、取材手法、放送方法にほとんど違いはないと思います。民放が際立ってNHKと違うのはワイドショーというものを朝、午後とあるいは場合によっては夜もやってるということ、ワイドショーの部門をニュースとみるかですね。

わたしは非常に硬派な者ですから、硬派につくって視聴率は下がりましたですけどもね、それで堂々としてやりましたらですね、それなりに見てくれる人が増えてくる。会社側はとにかく視聴率をあげなきゃだめだから、おまえみたいな堅いことを言っている様じゃだめだということになるんだけど、それに抵抗するしかないかというのがジャーナリストのですね、生き方にかかわってくるだろうと思います。でワイドショーは何故あれだけ流行るかというと、安上がりにできるからなんです。ワイドショーはほとんど下請けでやってるわけですね。でテレビ局の人間ってのはディレクターが居るだけで、あとその下に全部ピラミッド型に孫下請けみたいな形でやっている。賃金なんかものすごくテレビ局に比べて易い状況でやらされている。ワイドショーの面白さはニュース当事者とそれを追いかける人間を同時に見られることです。しかし、問題も多い。いま

横山弁護士をもう一あれはほとんどホームレスを痛めつけるような形でですね、横山弁護士を追いかけ、追いまくってますよ、もう人権的に許せないと思っている。横山弁護士もおかしいかも知れないけど、大学を出たかどうか知らないけどもですね、いい男がですね、めちゃくちゃな取材してるわけです。でもお祭り騒ぎ、ばか騒ぎをやっている状況を視聴者は喜んで見ている。これはニュースでも何でもないということなんですね。でNHKはそれをいまやってないからですけども、それに近いようなものは結構NHKでもある。それからニュースの公平性とかについてはですね、NHKの公平性というのは要するに色々意見があった場合は、時間的に平等に扱うという形ですね。だから自民党に何分、共産党に何分というふうなふうに、量的な公平性をとっている。それに対して、民間テレビの中では、そんな、公平性とかですね、中立性っていうのはないんだという人がいます。そもそも人間がものをみるかぎり、価値評価が伴う。より多くの人々に、納得してもらえような説得力のある形で放送すれば、それが公平であり中立なんだという考え方でございます。で私はどちらかという、後者の立場を取っております。それにもやっぱり、客観性とかね説得力がないものは絶対ダメです。

司会：ありがとうございます。どうぞ。

柴田：ちょっと、これ高橋先生のほうに質問してみたいんですけども、よくやっぱり自主性をもって、こういうことをしたら、君はなにを、君を自由にさせるからとか、おもいきり君のしたいことをさせるからと、これは非常に鼓舞しているように見えていても、やはり、主体性を持ちなさい、自由にしなさいということはいくら自由にしても、自由にしなさいとした人の枠の中に入っていることで、実は二重拘束みたいなのがあって、自由にはなってませんよね。そこらの問題、例えばどっかの社長さんが今日は忘年会だから、君たち無礼講でやりたまえと、なかなか話しのわかる社長だなどみえるかもしれないけど、無礼講でやっても社長の無礼講の範囲に入っていて、そこには二つの相反する命令が入っていて、三つ目に大事なものはそれに全然矛盾を感じない、そういうのが二重拘束ですがこういう教育というのが以外に行なわれていると、自分の、教師の枠の中でしか自由になってないという場合があります

が、その点いかなるものでしょうか。

司会：どうぞ。

高橋：今ご指摘の通り、現場教員というのは、確かに中高校の教師はわたしが接している間では、全くその通りで二重構造性を持つていうことがあります。特に運動関係が特に強いのです。それで現在問題になっておりますのが、教師の資質の問題というのは出てきているわけです。これは文部省のほうで事実考えている。どの程度の指標かという形で、むしろその教師の資質という、パーソナリティーの問題から全部入っていかねばならない問題だと思います。これについては、実は組合関係がございますから、これは組合のほうの関係との話が文部省は大変だろうと思うのです。だんだん日教組も昔の日教組と違って、順応性を持ってきておりますので、教師の資質の中からそういう問題について、また日の丸、君が代の問題から入ってもそうだと思うのですけれども、確かに今のご指摘の柴田先生の話のように二重構造性の教師はたくさんいる、特に先程申しましたその問題で二校の高校の場合も、指導教師がそういうような形でもっていくということが、現実でございます。

司会：ありがとうございます。どうも、どなたか。はい。

高橋：ついでにちょっと、申し上げます。実は新聞紙上等でマスコミの問題で賑わっております、あの、教師に対する体罰の問題ですけれども、あの体罰の、ケースを分析いたしますと様々なのです。一番大きくクローズアップされるのは、実は自殺の問題なんです。生徒の自殺の問題に対して公立関係の教師の問題はこれは完全たる、今の柴田先生の言った通り、二重構造性性格質でしょうか、とにかく異質な性格を持って、こう訳のわからない人間が、いま教師にたくさん多いことが言われる、特に公立の学校の教師が多いということが言われているのです。なぜ、そういうことが多いのかということが、これは今度は教師の問題なのですが、だんだんこう児童生徒数が減少してまいりますと、今度は教師の資質の問題、先程言いましたけれども、やはり現場でこういう問題、いじめ、自殺、不登校、こういうことがなくなならない、部活活動においてもそうなのですけれども、こういうように、その心コントロールをし、部活して優勝すれば自由になる。ともかく、な

んでもなるんだと、こういうようなコントロールをしてやっていく。教師は大体育の担当で、保健体育の教師が多いわけですが、そこで今問題になっております教師の心の問題、これは大変問題が今大きくなっております。やはり教師のこの心の問題の処置はどうあるべきか、これは医学関係のほうにも、関係してくるわけでございます。これは池本先生のほうの関係だと思ふのですが、実際に教職員の団体に加盟している精神科がある病院ではかなりの外来患者が行くということです。やはり、教師としての人格の問題、これで今度は、文部省のほうでは色々考えております。こういうことについての研究を進めていこうとっております。先程申しました、教師のこの体罰の問題でもそうなのですが、現場教師が資質が低下してきて、私は現職を、去って、退職して、ここ数年経つてますが、今こうみるとほんとに、資質低下してるなあという現場を覗きますとそういう感じをしております。それで、今度は東京都の場合、来年は五十人しか採用しないわけです。教員の採用は、今年は三百二名ですから来年たったの五十名です。五十名採用はどうなるのだろうか、東京都教育委員会人事部のほうでどう感じるのか、人事部長はどう考えているのかわかりませんが、来年は五十名、小中高養護学校含めて、五十名とこれしか枠がないのです。来年は、ですから、相当渋い。そうするとやはり教師の、メンタルヘルスの問題もそこにメスを入れて、教師のメンタルヘルスにメスを入れない限りは、学校教育はよくならない。子供の問題、こういうコントロールをしていくような悪質教師がいっぱいいる。中にはある宗教に属していた教師がいて、これをまあ退職させたと、それから転勤をさせた。これは中、高校にいるのですけれども、それでその学校が、母親のほうも、生徒がそれからカウンセリングによって心の開放がされたというような、事実都立高校でございます。そういうようなことで、東京都教育委員会関係でも大変厳しくこれから対応していかなければならないものであろうと思います。ついでに、そのことを申し上げました。

柴田：二重拘束の問題を、さっきは自由にしなさいと、という中に二重拘束というものがある、その枠の中でしか自由になってない、実は自由じゃないと、しかし実は私精神分析ばかりの療法ばかり

じゃなくて、催眠療法っていうのは割に長いこと、もう三十年か四十年かやってますけど、実はそれも催眠誘導の中には、催眠暗示の中には二重拘束というのは、非常に技法として意図的に入れる場合があります。例えば、膝の上に手が乗っている、その手がだんだん上がっていき上がっていく、そのときに無理に上げなくてもいいですよ、それかといって上がろうとするのも無理して止める必要もありません。というふうに、どっちにしていかわからない。そこにもう、向こうはひっかかっているわけですね。そうすると、トランス状態に入っていくと、実はこれは催眠の誘導や暗示がその中に、二重拘束の中に入って、我々は催眠療法ではよく使っているわけですね。実は、これは覚醒状態でもそれは二重拘束で、その時には向こうは一つの催眠の状態に近い、あやつられた形になってしまうということのあるということの二つを、そういう意味も含めて私言ったわけでございます。

司会：それでは、そろそろこの会をお開きにしたと思うんですが、感じたことを述べさせて頂きたいと思います。マインドコントロールの功罪ということで考えたんですけども、しかし、マインドコントロールって非常に特殊な意味もございますから、むしろ心のコントロールですね、心っていうと行動とか、思考とか、感情とか、信念とかそういう面をコントロールする、そういうような問題を考えることにしました。いわゆるこれが他者だとか自己であるとか、それからその意図の問題で、特殊なカルトのマインドコントロールの問題もあるので、これは大変な問題でしかも、アップツーデートな問題で非常に難しい問題です。ただこれも我々が検討してやらなきゃいけない。それから、これからのこういう在り方の問題で、いろいろ教育の問題、治療とかマスコミ、宗教の問題、あらゆる問題があって、人間の本質の問題、今後の未来における人間の在り方の問題に繋がることですので、この問題をやらせていただいたわけです。そこで4人の先生方のお話しをうかがい、われわれのこれからの研究課題、それからいわゆる実践上の問題でいろいろの大きな示唆を頂いたように思うわけでありまして。例えば、高橋先生の話によりますといわゆる教育の問題、特に先生は、学校教育の現場の先生とか、子供さん、親、ご両親に接しておられると思うんですが、案外こう

いうことを知らず知らずに子供の心をコントロールしている。それから知らずにやっている。要するに指導者もそうだし、それから子供もそうだ。その知らずというものが非常に問題なんです。これからはこの問題は自分で自覚して、例えば岡野先生が言われたNOと言えること、場合によっては、YES, NO,をはっきり言えるようになるということですね。これが、うやむやになってしまっている。こういう所の問題がある。それから次に、柴田先生の場合は、深層心理の深い所の問題で、自己愛人格障害というような問題、こういうような問題に入ってくるすと、これは我々の、いわゆる従来の表面的な指導ではどうにもならない。治療レベルの非常に深いところで、人格のいわゆる治療というかそんなような問題が出てくるし、これは、マインドコントロールというか、もっと基本的な一つの在り方のことにつながっていくように思う訳です。例えば、人にだまされ易いとか人に依存的って言うのは、基本的には、未熟な親といいますか、子供が、両親あるいは片親の、愛を十分受けていないで不全感で、愛を求めている。あるいは、親に飲み込まれていて、自由を奪われていて、それで要するに愛情を求めているっていうのは、親の言いなりになって、本当の愛情を受けてないわけですね。そういう問題なんで、そこが偽りの自己なんで、本当の愛情を十分に受けてみて、本当に健全な人格が成長するんです。見かけのことで、要するに親自身が愛しているつもりでいて、愛を奪っているという、そういうところの問題ですね。そんな所に、こういうマインドコントロールの問題がある訳です。非常に秀才と言われるそういう人達が、いわゆる本当の親の愛が得られていない、それでしかもまた教祖によっても得られなかったというそういう悲劇ですね。こういうことの起こらないように、我々は考えなきゃいけないように思う訳です。それから池本先生のお話しで、マスコミ問題は、すでに聞いていて、ある程度わかっていたのですが、今日はっきり専門家から裏話を聞きますと、すごいなあと思いました。だけど考えてみればですね、我々人間のプロダクションというものは、いわゆるフィクションで真実ではない。真実のものとは真実のようなものが入ってそこに面白みがある。例えば小説なんてのはそのままほんとに写実的だったら面白くない。絵もそうなんです。いくらフィクション

があるし、そのイメージーションでつくりあげてるそういう面があるということです。それからわれわれ視聴者の面ではですね、そういうことがわかっていて面白い。例えば、手品。子供というのは種があるから、どこか種がないか探している。ところがそれを超越していれば、種のあることを知っている訳だけ楽しめるっていう境涯、これが手品を楽しむってことでしょ。これは何か、インチキしているんじゃないか、詐欺があるかってよく詮索する人がいる。これは手品というものは、教養のある人はそういうことがあるってことがわかっていて楽しめる、そういうところがある。ところが、それをほんとだと思込んでしまう。これはみんな偽りだと言って怒ってしまう、これは大人じゃない。そういう面ではやはりマスコミでは、我々の視聴と言いますか、見る側の教養を高めていかなきゃいけないかなとい

うこういう事を、今日池本先生から色々教えてもらえたんじゃないかと思っております。それから最後に岡野先生がいわゆる閉じた宗教と開いた宗教と言われましたが、いわゆる既製教団が開かれた宗教ですが、だけど最初は閉じた宗教だったこともある。考えてみれば、そういう面を持っていた面があって、それがある程度段々と成長してきたという面がある。また岡野先生が宗教を見る基準として、開く方向に向かっているかどうかを見ること、また心を開いていくための心のコントロールが大切であることを述べられていることに注目したいと思います。

本日は、有益な興味あるお話しをしてくださいましたシンポジストの先生方、また重要な質問や意見を下さいましたフロアの先生方、誠にありがとうございました。